
オレとアイツの人形劇 【リメイク版】

しゃおろん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレとアイツの人形劇 【リメイク版】

【Zコード】

Z5753Z

【作者名】

しゃおりん

【あらすじ】

ある日突然クラスメイトの伊藤君と勇者として異世界に召喚され、勇者として頑張るお話を見せかけて、勇者としての扱いを受けるのはクラスメイトの伊藤君のみ。

そして召喚されて1日も経たないうちに空気のような存在になる主人公。

居るかどつか怪しい魔王の討伐に伊藤君たちと向かうが、伊藤君たちにはいいように扱われ、ギルドの依頼で稼いだお金を伊藤君たちに持つていかれとやつてらんないんだぜ。

とこうよりもいきなり召喚して魔王を倒せだなんて無茶言つなよ…。

注意

長い長い更新停止から田覓めましたしゃおろんです！
様々な苦難を乗り越え久々に描いていこうと思い復活したわけですが、なんだこの稚拙なものは！？

となつたので少しですが文章力も上がったと思うので心機一転リメイク版としてこの作品を更新していきたいと思います。
リメイクといつても対して書いてなかつたわけですが…
ゆつくり更新していきたいと思いますのでぜひともよろしくお願ひいたします。

第一幕 ヘプロローグ（前書き）

始めての方は始めて、お久しぶりの方お久しぶりです。
しゃあんです、何とか復活しましたよー
復活の呪文を唱えること数十回何とか生き返ったのですよ

また作品共々よろしくお願ひいたします。

では、オレとアイツの人形劇 【リメイク版】開幕で「やこまつー

第一幕 パブロローグ

真白なクロスに黒い床が広がる一室。

そこには壁沿いに本棚が並べてあり、様々な種類の本が所狭しと詰め込んでいる。

お世辞にも衛生環境がよいといえないような部屋の中心に黒いテーブルと椅子一つを置き、そこに腰掛けている若い男の姿があった。彼はそんな部屋であるにもかかわらず優雅に紅茶を飲み、幸せそうに一冊の本を撫でている。

その手つきはまるで自分の愛するものに対するもの。

所謂、愛情といつものがあふれていたように感じじる。

そして彼は誰に向けるわけでもなく一言つぶやいた。

これが始まりの本だと。

そつとつぶやいたその言葉には過去を振り返る老人のような哀愁が漂つており、とても彼のような若い男が出すような雰囲気ではなかつた。

彼は黒いスラックスに白いワイシャツを着ており、上に茶色のセーターを着ている。

胸元に首から茶色の紐でぶら下げる銀の懐中時計が目立つ。ふと何か思い立つたようにその懐中時計で時間を確認した彼は懐中時計を指で突きながら深いため息をつく。

さながら恋人を待つ女性のようなその仕草は思いのほか彼に似合つたものだった。

「やつはまた遅刻か、これでは開演に間に合わないではないか。

その言葉は相手に届くことは無かつたが、幾度と無く口こした言葉の声がえらく馴染んでいた。

再び手を先の本に戻し撫で回しながら田を開じ、物思いに耽るよつに静かになるが、ひとつのお音がその雰囲気をかき消した。

「あー、お休みの途中かしあー。」

声の主は女性であり、まだ大人になる前の少女のような顔立ちだ。服装は赤チェックのスカートに黒のシンプルなブラウス、それに加え赤のネクタイ。

髪の毛は肩のほどまで伸びており、まっすぐとしたストレートであり艶やかな黒色をしている。

彼女はよほど髪の毛の手入れに気を使っているのであわいとこいとが容易に気づくほど綺麗な髪の毛だ。

「馬鹿いってんじやないよ、こつも遅刻ばかりの君のために送る言葉を考えていたのだよ。」

「やうなの、それはどんな言葉なのかしあー。」

すかさず彼はこいつ答える。

「遅刻すると胸ついてかかるんだぜ。」

「へえ、それは大変。今度から気をつけよりますわ。」忠告ありがとうござります。」

満面の笑顔を浮かべてこむ彼女の胸はまるで絶壁のようだった。

オレと「アイツ」の人形劇 第一幕「プロローグ」

目覚めるとそこは石でできた部屋の中だつた。

隣にはクラスメイトの伊藤君が全裸で横たわつており、自分も着ていた筈の制服がすべてページされていた。

状況を説明するど「存知のとおり自分もまたまた全裸なのであつた。そして、この激しく誤解されそうな嫌なシチュエーションから全力で逃げ出したい気分だ。

どうやらまるで生贊を捧げますと言わんばかりの祭壇の上に俺と伊藤君が寝ころがされていたようだ。

周りを見渡すと不気味な雰囲気が浮き彫りになつてきた。

正方形の部屋の真ん中に生贊の祭壇つぽいもの、四方に設置された蠟燭。

祭壇の下にはどこかで見かけてそうな魔方陣らしきもの。

また、その祭壇が真っ赤な、まるで血によつて描かれたようなものということ。

ここまで本当に勘弁してほしいのだけれども、最大のヤバさを誇る全裸の伊藤君。

ないわ、これないわ。

何で伊藤君が祭壇の上で7割の場所を使って寝転がつてんのに俺3割やねん。

微妙に狭いねん。

誰や世界は海と陸や七三分け、働きアリの法則とかのよつて3・7か2・8が丁度ええんやつて言つてた奴出て來い。

そんな奴一回俺のこの右腕をもつてして処刑したるわ。

心の中で無駄に関西弁で愚痴りながら伊藤君のアホな寝顔を見ていると田の前の扉がゆっくりと開いた。

入ってきたのは高校生くらいの女の子とガチムチな筋肉と全時代的な軽い防具を装備したお兄さん一人だった。

そのうち女の子が桜色をした綺麗な唇を開き言葉を発する。

「どうやらお目覚めのようですね、勇者様」

とんでもない一言が飛んできましたとさ、オジサンびっくりです。勇者発言した女の子は腰あたりに赤いリボンが付いている白いフリフリのドレスを着ており、綺麗な黒髪をしていた。なんという美人でしょうと感動してしまいそうなくらいに容姿が整っている子だ。

少し見惚れていた間にか起きた伊藤が真先にその子に近寄り、真白で今にもとけてしまいそうな雪の色をした手を握っていた。

「はい、俺が勇者です。」

「ありがとうございます。これでこの国も…」

手を握られた瞬間両脇に立っていたガチムチお兄さんたちが動こうとするも、それを目で制した女の子が伊藤君に感謝の言葉を言つている。

そのときチラリと誰だこいつといった田を向かれたことを俺は絶対に忘れない。

そう、絶対にだ。

「召喚されたすぐ後ですからお疲れでしょう。まずはお部屋に案内いたします。それからその…こちらをお召しあげださい。」

そういうて一着の服を女の子がガチムチお兄さん1から受け取り、頬を染めながら伊藤君に渡す。

あれ?俺の分は?と口に出す前にガチムチお兄さん2が頬を染めながら俺に一着の服を渡してくれる。

頬を染めているお兄さんに危険を感じたので急いで服を着る。全体的にだぼついた灰色の服で、ボロッちい感じだが着れないことも無く、裸よりも断然いいのだが俺にはどうしても納得いかないことがひとつあるのだ。

俺の服装がまるでしょぼい農民が来てそうな服にもかかわらず、伊藤君の着ているものは俺の着ているものとは打って変わって白のズボンに黒のシャツそして白いベスト。

なんというか金色の刺繡が入っており、成金臭さのするものだった。別にそれが着たいとかそういう感情でものを言つわけじゃないんだが、この差は何なんでしょうかと問いたい。

そして、俺たちが服を着終わると女の子は兵士を連れて伊藤君とどこかへ行こうとするので、遅れまいと慌てて早足で追いかける。まるで中世ヨーロッパのお城のような内装の大きな廊下を後を追い歩く。

ゆっくりと城の中を歩いていると幾人もの貴族のよつた服装の人たちとすれ違う。

段々と嫌な予感に苛まれつづく好奇心を抑えきれずチラチラそこら

じゅうを見回しながら歩く。

「いやりです。」

ガチムチお兄さんの声でふと氣づいていた巫的の部屋に付いたようだつた。

周りに興味を惹かれすぎていたためまったく気づかなかつた。

そして俺があちこちを見る間に女の子と伊藤君が仲良くなつて少しうらやましいがこの際仕方ない。

今後仲良くなつていけばいいやと諦める。

俺だつて男の子、可愛い娘と仲良くなりたいのだ。

お兄さんに促され部屋に入ると、そこは豪華すぎて立ち眩みしそうなほどのものだつた。

天蓋つきで綺麗な色のベッド、赤色を主に使つていたり金の刺繡で豪華さをあらわしているカーテン。

色鮮やかで凡人の理解が追いつかない値段の予感がする坪。この部屋にいるだけで目がチカチカして来そつだつた。

またもや俺が周りを見ていると勝手にストーリーが進んでいくようだつた。

何故か一つしかない椅子に腰掛けている女の子と伊藤君が話し込んでいる。

どうやら女の子の自己紹介していたようで、女の子は巫女で名前はリリエナといひつい。

ここからが本題なのだが俺たちはこの世界に召喚されたようなんだ。しかもこの世界には魔法が存在し、さらには魔物や魔人、魔王までもが存在しているというのである。

一概に信用することはできないのだが、リリエナが魔法を使って水

を作り出したので信憑性が高いと思つ。

そして魔王が現れたので、ぜひ俺たちに倒してほしいことである。

ふざけるなと言いたいが、魔法が使えるところのはづれしい。

男は30歳まで童貞でいることにより、童帝になり神より魔法の力を授かるとある文献に載つていたのだが、30歳まで童貞でいるのは勘弁してほしいところだ。

だから魔法が使えるのはづれしい。

しかし、そのために命を張らなくてはいけない。

魔法を使うというのはそれほど難しいことなのだろうし、世の中では等価交換が当たり前なのだからそのために命をベットする必要があるのだ。

まあ、今更返してくれといわれても無理らしい。

帰還するには魔王の心臓が必要で、そのためには魔王をぬつ殺して奪つてくれるしかないのだといつ。

詰んだ。

直感的にそう悟つた瞬間だった。

なんにせよとりあえずは魔法の適性を調べてくれるところの、素直に調べて貰うとする。

なんだかんだ言つてもワクワクを止める」とはできないのです。

ところ変わつて王座の間。

学校の体育館ほどはありそな勢いの大きさをしてる王座の間に伊藤君たちの後をついていく。

王様の堅苦しい言葉を頂戴してまるで校長のようだなと考え方つ伊藤君の検査を見守る。

伊藤君は水晶のようなものに手も当て目を閉じている。
やがて水晶が神々しい光を放ち始めあたりがぬるりとした感覚に包まれた。

これが魔力なのかつー? ピリカ! 遊びをしてるひたすら結果が出たらしい。

伊藤君の魔力値は21万らしく、適正属性は火、水、土、風、光。
これは異例のことのようで周りがざわついている。
リリエナの説明によると普通は2、3個の適正属性で天才レベルだ
ということだ。

一般だと1個の適正が当たり前なんだそうで、そこまで来ると神の領域だと伊藤君は褒めちぎられていた。

さらに魔力値は普通が500~1000で、優秀なものが4000~5000ほどらしい。

魔力で魔術師の戦闘能力が決まってしまいかねないこの世界で、伊藤君の魔力値は破格のものだろう。

これはまさに勇者にふさわしいというものだ。

俺が言えた義理ではないが伊藤君は元の世界で良くも悪くも普通で、
容姿は日本人そのもの。

身長が少し高いくらいで、運動神経も学業のほうもおおよか中間地
点だった。

そんな伊藤君はここでの世界のほうが住み心地がいいんだろうなと
考えていると俺の番が回ってきた。

前に出て水晶の前に立つと周りからの嘲笑が聞こえてきそうな雰囲
気だった。

周りに立っている貴族のような人たちが主な原因なのだろうが、ど

の人も俺の服装を見てあざ笑っているようだ。

そんなことに負ける俺ではないので水晶に手を当て、目を瞑ると手のひらからぬるりと魔力のようなものが抜ける気がした。
少しすると水晶が伊藤君のときと同じように光る と、思いきや部屋全体が伊藤君のときよりもぬるぬるしている上、薄暗く光る。

この光り方は人それぞれなのでいろいろ在るみたいだが、周りの反応を見る限り普通のことではないようだ。

薄暗い光りで結果が文字になって現れる。

その文字は見たことも無いはずなのに不思議と読めた。
どうやら俺の結果は魔力値が7万で適正のほうは水と闇のようで、まだ優秀なレベルに落ち着いているようだ。

魔力値は伊藤君よりも低いもののほかの人と比べると異常なまでに高い数値だ。

嬉しいが、伊藤君よりも低いので若干微妙な気分だった。

俺の結果も上々のようだったが如何せん伊藤君のほうが高く、服装もしつかりとしているので周りの人はあちらに目がいっているようである。

俺の結果を王様が確認した後、またお言葉をいただいて退室を促されたのでそそくさと王座の間を出ることにした。

出てすぐに伊藤君はリリエナとどこかに行き、俺はガチムチお兄さん2に部屋へと案内して貰うことになってしまった。

先ほどリリエナから説明を受けた部屋のようなものを想像していたが、案内された部屋は質素なもので机と花瓶の置いてある棚、普通のベッドが置いてある部屋だった。

部屋の中に入るとお兄さんが付いてこないか心配だったが、特にそのようなことは無く何か困ったことがあつたらいつてくれ。

と田をそらしながら頬を染めて言われたくらいで特に何も無かつた。

少し疲れていたのでベッドに身を投げ出して大の字で寝転びながら頭を整理する。

変なことに巻き込まれたなと思いつつも考えても栓の無いことなのでやめる。

明日から日記でもつけるかなと考えているとよほど疲れていたのかすぐに意識を手放した。

第一幕 ハプロローグ（後書き）

少し少ないかな?と思いつつも切がいいのでここで投稿。

第一幕 ペプロローグ2（前書き）

でろりーぬが最近言つことを聞いてくれないのれす。
買つた当初は従順な子だったのに……

公園でわんこと戯れてたら幼女たちが寄つてくるので一緒に遊んだりします。

冬なのに子供たちはいつでも元気だねえ……その若さを分けてくださいな

あ、活動報告いろいろ書いていつと愚つのでたまに見てやってくださいな。

第一幕 ペプロローグ2

強い日の光を受け、誰に起されたるわけでもなく自然と目が覚めた。
どうやら昨日も着たボロい服のまま寝てしまっていたようだ。
よほど疲れたのだろう、昨日のお腹寝過ぎに寝たはずなのに今は
もう日が登りきっていた。

しかし、起きたのはいいが今後の予定をまったく知らされていない
上、それをどこに聞けばいいのかさえもわからないという状況
だ。

仕方がないので誰か来るまで部屋を散策することにした。

昨日の時点では気が付かなかつたが、この質素な部屋からはあまり
想像できない綺麗な色と形をしたバラに似た造花が花瓶にさしてあ
る。

少し気になつたので手に取ると質感からやはりこのバラは造花であ
ることがわかつた。

持ち上げるとカラソッシュとものが落ちるおどがしたので花瓶の中身を
見てみると、シルバーの指輪が入つていた。

シンプルな指輪なのだが内側に小さく文字が刻印されている。

その数は大量で小さすぎて読むことはできないが、かなり精密な形
で書かれている。

誰かが忘れていったものかもしれないの後で誰かに報告しようと
回収しておく。

指輪を棚の上においた瞬間右にあるドアがゆっくりと開いた。

空いたドアから昨日部屋まで案内してくれたお兄さん2が、食事を
トレイにのせ部屋にはいつてくる。

放置されていたためガチムチなお兄さんでも来てくれただけで今は
とても嬉かつた。

指輪の「」とか今後の「」とか色々聞きたいことがあつたため非常に助かる。

「おはよー、食事を運んできたから暖かいうちに是非食べててくれ」

顔の厳しさに似合わず滑らかで低音のいい声が部屋に響く。

雰囲気はさながら爽やかな男子だ。

「ありがとうございます。昨日からなにも食べてなくてお腹がペコペコで…助かります…」

お兄さんは笑顔で領きながら食事をテーブルの上に並べる。冷めないうちに食べようと椅子に腰かけると向かいの席にお兄さん2も座る。

「失礼するよ。いいかな?」

と少し恥ずかしそうに頬をかきながらお兄さん2は座つた。印象は少し厳つい感じではあつたが、対面して表情を感じ取ると寧ろその中に柔らかさのある不思議な人物だった。

「あー、どうだ。一人で食べるのも寂しいものなので」

「ありがとうございます、君も聞きたいことがあると思うし食べながら話をしよう」

あ、オレの名前はエリック。

君の世話を頼まれたんだ、これからよろしくね

「是非ともよろしくお願ひします。

安部春臣といいます。

あーっヒ、ヒちらだと春臣の部分が名前になります

「ヒちらヒセ、世話なんて言つたけど俺も本業は見ての通り兵士だからあまり期待しないでね？」

爽やかに笑いながらヒリックさんはそう言つた。

「あ、そうだ。先ほどの花瓶のなかに指輪が落ちたのですが…」

そういうながら席を立ち、先に拾つた指輪をもつてくれる。
指輪をテーブルの上に置くとヒリックさんは不思議そうな顔で首を
かしげ、それを手に取つた。

じつくじと見てくるようだがそんなに珍しいものなのか。

「そんなところに指輪が？ヒの部屋は作られてからあまり使われて
ないからそんなことはないと想つんだけど…
それにこれは内側に魔術の刻印が施してあるね。
専門じゃないけどそこそこ値の張るものだと思つたけど。
ありがと、とつあえず報告しておくる」

ヒリックさんは不思議に指輪を胸のポケットにしまつて、春臣に顔
を向ける。

「是非お願ひします。あと、その…恥ずかしいんですけど、魔術刻
印つて言つのは…？」

「全然恥ずかしいことじゃないよ。

まあ、あれだけの適正があつて知らないのはびっくりだけどね。
魔術刻印つて言つるのは主に魔術を発動するときに使うんだけど、こ

の指輪にはそれに使う文字がすべて刻まれているんだ。

で、全部刻まれているとどうなるかといつて、簡単に言えば魔術の発動をより強力かつ速く発動することができるんだ。」

「どうやらなかなかすごい物のようである。

しかしそんなものがあんなどうに放置されていたのか謎である。

「さうにこれは見たところによると発動体としても使えるみたいだね。

あ、発動体って言つのは魔術を発動をサポートしてくれるものだよ

「な、なるほど… 謙するになかなかいいものだといつしますね」

少し長くなりそうなので一回切る。

「まあ、端的に言えばそういうことになるかな。

」の指輪は一応報告しておくよ、ありがとうございます。」

エリックさんも長くなつたのを察したのか話題を手早くきつてくれた。

「エリックさんは魔術に詳しいみたいだけど、もしかして使えますか?」

「まあ、使えないことは無いけれど才能が無くてね… 努力はしたんだけどどうも剣のほうが才能があつてさ…」

少し空気が悪くなつたので、申し訳ない気がしたけれどなんと言つていいか分からずとりあえず食事に手をつけた。

トレイに乗っていたのはシチューとパン、それに水だつた。

シチューをスプーンですくい口に運ぶが冷めており、薄味で雰囲気も相まって美味しいものではなかつた。

「ま、まあ、今は満足してんだけどね

エリックが気まずそうに変な方向を向き頭をかきながらこの雰囲気を開けてくれる。

中々いい人だなと思ひながら、いろいろ聞く。

エリックさんはどうやら姫の近衛隊の所属らしく、どうやらエリー トらしかつた。

最初は魔術の勉強をしながら学者を指していたようだが、どうも適性が無く父親が軍人ということもあり、剣術を学んだらしい。剣術のほうは才能があつたらしく鍛え始めるとすぐに力をつけて近衛の試験をパスしたらしい。

「あの、エリックさんに『こんな』こと頼むのもあれなんですけど… 魔術、教えてくれませんか？」

エリックさんに聞いてみると、笑顔になり僕でよければと了承してくれた。

上手いこと魔術の勉強を手配できたので、うれしさのあまり何度も頭を下げた。

「あ、あと敬語はやめにしようよ。

これから一緒にいることも多くなるだらうし、堅苦しいのは好きじゃないしね。

僕は春臣と呼ばせてもらつよ。」

また恥ずかしそうに頬をかきながら言つエリックさん。

いや、エリックは窺うような目で見ているが、今までの仕草や言動

から好感がもてる人物だということは十分理解できるものだつた。

「是非つゝよろしく、エリック。」

その言葉を聞いたエリックはまたまた頬をかく。

「じわらじわよろしく。

はははつ、なんだか嬉しいよ、僕実は友達少ないからね…」

どうやらその仕草は恥ずかしさを紛らす癖なのだろう。外見だけをみると、とても似合いそうには無いがその姿は妙に様になつていた。

ご飯を食べ終え、エリックの古着だという服を新しく獲得し着替え、とある部屋の前に着いた。

古着にしてはまだ新しいもののような服はなかなか仕立てのよいもので、目立つことなくしかしこの前のように笑いを誘つような服でもなかつた。

エリックが扉を開け、俺に入るよう促すとすぐに扉を閉めてまるで逃げるかのよう去了つた。

中を見渡すと伊藤君とリリエナ、それに知らない女性が三人いた。三人とも美人でチープな言い方になつてしまつがアイドルグループのように見えた。

一人は燃えるように赤く激しく短い髪に活発そうな表情に目は少し細く、鋭い眼力を放つているが全般的に愛嬌のあるまだ少女のよくな女の子。

全体的にしなやかそうで華奢な体をしているが、持っている武器が見た目ままではないぞと主張している。

二人目に緑色でロングストレートの髪の毛をしており、少したれ目な女性。

おつとりとした雰囲気が離れていても分かるほどだった。
さらに、ローブを着ているのだが一部の部分がすばらしい具合に盛り上がりしており、男として非常に惹かれるものがある。

最後に金髪の女の子で、この子はまだ未成熟な体をしており、とても女性と呼べるような子ではないのだがこの中でも人一倍勝気な顔をしている。

田は少し釣り目気味で小生意気な悪魔という表現が正しく思えるような容姿だった。

見る人が違えば天使にも見えるような容姿ではあったが、少なくとも小悪魔のように感じたのである。

長い机の奥に伊藤君と巫女さんが並んで座っていて、伊藤君の左側に金髪の子。

右側の巫女さんのほうに緑色の髪の女性が座つており、その隣に赤髪の子が座つていた。

入室した際、全員から一度視線を向けられたがまったくといつていほどほかの反応が無く、再び5人は会話に戻つてしまつた。

会議というのもおこがましいほどにお粗末なものだったが、その内容が進むにつれ俺の存在は空気のように溶けていくようだった。

結局自己紹介もされぬまま椅子に座ることもなく部屋の隅で立つて聞いていた。

内容は30日間で伊藤君を鍛えて、その後ここにいるメンバーで魔王を探し出し討伐の旅に出ることに決つた。

しかしづづくりするのは魔王が現れたという啓示があり、その魔王の姿が確認されていないのにも関わらず、王家秘蔵の召喚魔術システムが刻まれたあの祭壇で勇者召喚の儀を行つたようだ。

会議が終わった後、伊藤君たちが談笑してゐるのを尻目に部屋を出ると扉のところにエリックが申し訳なさそうに立つていた。

「さつまばいめんね、どうももう一人の勇者様が苦手でね…」

そういうながら申し訳なさそうにする彼に話を聞くところによると、勇者の従者として選ばれたものたちの中から一際美人の子達を選んだ上、周りの人間に對してかなり高圧的な態度をとつてゐるようだ。もともとのイメージではそのような感じはなかつたのだが、ここに来て本当にまだ全然たつていないので変わつてしまつたようだ。

「あー、伊藤君のことかな？なんか一寸俺が知つてる時とは違うなあ…今の伊藤君は…」

伊藤君のことも気になるところだけれど今は自分のことが精一杯。まず身の回りのことを済ませうと思つ。

「エリック、予想通り魔王の討伐に向かうことになつたんだけど、魔術の件今日からお願ひできない？」

エリックには急ですまないとは思いつつも、旅立つときになつて準備不足では洒落にもならない事実だからな。

「全然いいよ！あ、そつそつ春田にこれを渡しておくれよ

胸ポケットを探り取り出したものは先ほどの指輪だった。

「どうも、よく分からぬものじゃなくてね。処分してくれといわれたんだけどもつたいないし春臣が使うだらうじ渡してくれよ。」

「うーいながら心なしか先ほどよりも綺麗になつた指輪を受け取る。

「あらがとう、助かるよ。そうと決まればまず一般的な常識からざひとも」教授願います、エリック先生」

「ひかりにようしき。わあ、早速行こうか。まず見てほしーものがあるから先にそこに行こうか」

第一幕 ペプロローグ2（後書き）

予定より早く完成ー。

誤字脱字報告、感想、評価、などなど幅広くお待ちしておりますー

第一幕 {プロローグ3} (前書き)

やつとりて投稿なのやー

もうすぐ年が明けますねー

皆さんはどんな年だったのかな?

では少し短いですがどうぞー!

第一幕 ペプロローグ3

エリックに引っ張られて付いていった先に在ったものは図書館だ。かなり広い部屋に所狭しと本棚が並べられ、そこには数え切れないほどある本が収納されていた。

ジャンルだけでも様々なものがあつたがやはり一番に目に付いたものは魔道書、所謂魔法の本について書かれている本だった。

「春臣に見てほしかつたのはこここの本だよ。

外に出るならやつぱり自衛位できないとだし、幸い春臣は魔法の適正があるわけだしね。

「ここにある本でがんばつて勉強しようか！」

「エリックさん、いくらなんでもこれだけの本を勉強するのはちょっと…」

「大丈夫、ここにあるのはそのほとんどが専門書だから。片手で初心者本なんて数える範囲しかないよ。」

そう言いながらエリックが手に取つた本にはわかりすぎる魔法の本初級編と書かれているものだった。

激しく地雷臭が漂つようなタイトルの本ではあつたが、エリックが出すのなら問題ないのだろうとそれを素直に受け取る。

「初級だけだとすぐ終わるだろうから中級の下巻まで借りてこいつ

か

エリックは軽々と中級の上下巻を一冊とり手渡す。

一冊が10センチほどの本の重みは今すぐにでも捨てたいほどのものだったが、これが自分の命綱とも言えるものなので気軽に捨てるわけにはいかなかった。

その3冊を借りて部屋に戻り、勉強に取り掛かるとエリックはそそくさとどこかに行ってしまった。

本を読み進めると魔法の発動には幾つかの種類があるということがわかつた。

一つは紙や地面などに直接魔方陣を書いて発動するもの（サークルモーション）。

二つ目に杖などの魔力媒体を用いて空中に魔法人を描き発動するもの（ステイックモーション）。

三つ目にイメージとして不安定にはなるが、自分自身の心の中に魔方陣を描き発動するもの（セルフモーション）。

四つ目に指輪を媒体に魔力をこめた言葉で魔方陣を言葉として詠唱し発動するもの（トークモーション）。

自分でできるものは二つ目の杖を使うもの意外である。

それぞれの利点をあげていこうと思つ。

サークルモーションで最も大きい利点として挙げられるものは事前に用意しておけるという点である。

その代わり紙にこめることのできる魔力量は限界地が低いので、威力に制限がかかったりキャラパシティを超える魔術は発動できないということ。

しかし、発動の速度は最速で非常に汎用性が高いものである。

また、魔法陣が描いてあれば魔力を流すだけで発動できるので、描いた張本人でなくとも発動することができる。

魔方陣の描いた紙を魔術符というのだが、これは一般的の市場にもよく出回っているようだ。

ステイックモーションの最も大きな利点はそのバランス性があげられる。

威力は中程度で速度も中速ではあるが、臨機応変に対応ができる上に魔方陣を描くためのキャパシティの制限がほぼ無く、これをメインに魔法使いが最も多い。

ただデメリットとして中途半端になりがちもある。

セルフモーションはその秘匿性にある。

このモーションは道具、詠唱、魔方陣のすべてが自分で行われるため魔法の発動した瞬間にしか他の者に見えないのである。

四つの中でも一番の曲者はこれであり、最も使用者が少ないのもこれである。

その理由は他の何よりも発動において不安定になりがちなのである。また魔方陣を描けるキャパシティ、威力、発動速度は人それぞれ違つており、才能に左右される部分がある。

しかし、そこさえクリアできてしまえば一番の利便性を発揮するだらう。

最後のトークモーションは発動中自分の行動が制限されないとこりや威力の高さが大きな利点である。

四つの中でも速度が最低なもの、威力が一番高くキャパシティ制限が無い。

しかし、言葉に魔力を乗せる部分が一番難しく才能に左右されてしまう部分がある。

さらには詠唱中に下手をすれば相手に発動する魔法がばれかねない

ところへ一番の問題を抱えている。

いろいろ考慮したうえで一番学びやすやうなものはサークルモーションであるようなので、まずはここからはじめよつと想つ。理想系としてはサークルモーションで牽制しつつ、トークモーションかセルフモーションでけりをつけるというスタイルを目指したい。まあ、ここでも自分の弱い頭を使って理屈をこねるよりも行動したほうがよれやうなのでまずは学ぶことからはじめる。

まず必要なのは魔力の操作なのだ。

これができなければまったくといつていいほど意味が無く、いくら魔力量が多くうつと宝の持ち腐れなのだ。

本に書いてあるのを見ると魔力はどこにでもありふれている力で、魔力量とはその人が貯蔵しておける最大の量らしい。

空中には大量の魔素と呼ばれるものが浮かんでおり、それを体内に取り込むことで魔力を生産し貯蔵するようだ。

魔法の発動をわかりやすく説明すれば、魔力が電気で魔方陣が回路なのである。

魔力を感じるために目を閉じてゆづくと意識を体内に向ける。

思えば向こうの世界にいたときは毎日が忙しくいつもして自分の体としつかり向き合つことは無かつたようだ。

ずつと自分自身の体に意識を向けていると吸い込んだ空氣の味や心臓の鼓動や脈打つ血管、血の流れを感じる

そうやつていると自然と自分が周りから浮いてくるよつた感覚にとらわれる。

ほつとした感覚に身を委ねて、ひたすら無心でいると自分の中に新しい感覚が生まれた。

心臓の鼓動や血液の流れとはまた違つた、冷えた空氣のよつたもの

が体を駆け巡つているよつなものだ。

今度はそいつに意識を向け駆け巡るさまを感じていると段々とそれが暖かくなつてきた。

おそらくこれが魔素と呼ばれるものなんだろうなと思い追いかけているといふ魔素の通り道に一際暖かい場所があった。

丁度鳩尾と呼ばれる場所の少しずれた奥のほうなのだが、何か結晶のような物があるようと思う。

その結晶の周囲にはおそらく魔力であるつ温かい血液のよつなものがあることを這う様に渦巻いていた。

そして、それをすつと手のひらのほうに引っ張るよつて意識するといつめージどおりに進んでくれる。

魔力を手のひらに出し、クルクルとまわし遊んでみるとそのままに動いてくれる。

ふと目を閉じてみると気が付き開けて魔力を見てみたい衝動に駆られたので、ゆつくつと目を開けるといつすらと水色に光る魔力があつた。

あまりの感動に集中が解けてしまったのかそれは霧散してしまつ。

少し寂しく思いつつももう一度、今度は目を開けながら試してみるとまくいつたようだ、また手のひらで魔力で遊んでみる。

猫や犬などの動物の形を作つて遊んでみると、どれも不細工で自分の才能の無さに笑つた。

いつやつてゆつくりと遊ぶのもいつ振りなのだろうかと考えたが、どうにも答えは見つからず日本にいたときのことを思い出し、寂しくなつてしまつたことで魔力が空中に消えてしまった。

少し疲れたなと思い外に目を向けてみると薄暗くなつていた。

ずっと椅子の上に座つていたため体中が痛く、伸びをして体をほぐす。

テーブルのほうに目を向けると食事と手紙が置いてあったのだが、どうやらエリックが来ていた事にも気が付かなかつたようだ。

手紙には夕食を置いておくと書かれており、食事が冷え切つてゐるところを見る限り明け方のようだ。

いくらなんでも集中のし過ぎではないだらうかと考えつつ、皿に乗つてゐる冷えた何かの肉を齧つた。

あの後食事を終え、ベッドに身を預けて寝た。

そして今、エリックに起こされ簡単なレザーでできた防具をもらい装備したところである。

安らかに眠つているところにエリックが布団を引つべがし起こした上に寝ぼけているところに口を開けられ、さらにはパンを突つ込まれ無理やり朝食を取らされた。

やつとのことで田を覚ました瞬間に防具を渡され装備するように言われ、装備してみるといやにぴったりとしたサイズの印象が残る防具という謎に包まれた。

いつたい何時の間にサイズを測つたのかわからないが、貰えるものは貰う主義なので貰つておくことにする。

そのほかに少し大きめのナイフを一本貰い、それをレザーのジャケットのわき腹にあるナイフをしまう場所に挿す。

「ああ、準備もできたようだし近くにある森へ狩りに行こつか

「ちょっと待つんだエリック。

今狩りといったかな？ 一つだけ聞いてきたいんだけど何をだい？」

「決まつているじゃあないか！魔物だよ！」

エリックの爽やかな笑顔に初めて明確な恐怖を覚えた瞬間だつた。

「いやいや、まだ自衛の手段も整つてないし今回はバスしたいな」

明らかに危険すぎると踏み、断るつもりなのだがエリックは頑なに譲らず、結局のところ行くことになつてしまつた。
その決め手となつたのが今後自分がどういう敵と戦うのか魔法をしつかりと学ぶ前に知つておく必要があるといわれたことだ。
当然の「」とく森にも浅いところまでしか入らず、少し探索して帰るということなので付いて譲歩していくこととした。

移動は馬車で行い、中でエリックに昨日の成果を見せていく。

「春臣の魔力量つてすごいんだね。

僕だったらこの魔力濃度をこれだけの量外に出したら氣絶しちゃうよ。」

「あれ？ そつなの？ てっきり光つてているのが少ないから「」んなものかと」

「違うよ普通はもつともつと薄めて使うしね。たとえばこれくらいかな」

そういつてエリックは手を差し出して見せてくるが魔力があるようなど思わせる程度で視覚には移らなかつた。

「なるほど、普通は魔力は見えないのか」

「そ、そ、魔力を見えるほど出せるなんて中々ないよ。しかもそのすごさを自覚せずに出すなんてもつといないよ。」

エリックは少しすねたような顔をしながらこちらも見てくるが、本人は特に気にしているようには見えず茶化すような感じだった。

「まあ、僕は魔力に恵まれなかつた代わりに気力にはそこそこ自身あるんだけどね」

そういうながらエリックは再び手のひらを差し出してきたのだが、今度は先ほどとは違いそこにはうつすらとした赤い光りがあった。

「これが気力？ そんなものがあるんだ…」

魔力だけでなく気力まであるなんて、まるでゲームのようだなと思つているとエリックが説明してくれる。

魔力は自然にありふれているエネルギーだが気力は生命エネルギーなんだそうだ。

生命エネルギーといつても命を使うわけではなく、生物が生きているうえで発生するエネルギーなようだ。

生物なら大なり小なり持つており、気力は魔力と違いトレーニング次第ではその蓄積量を伸ばすこともできるそうだ。

「魔法使いは魔力を、戦士は気力を主に使つて戦闘するんだよ。まれにその両方を使う人もいるけど、そんな人は中々ないね。で、僕は気力を使う戦士ということなのさ」

氣力も魔力と扱いは似ているようでそれを視覚化できるほど放出したエリックは戦士としてはかなり優秀ということのようだ。

そんな新しい発見をしてこの山地に着いたついで馬車から降りる。

エリックは御者に待つように命令してから、装備を整え森には行った後の注意事項を教えてくれた。

とはいってもそれはそんなに多くなく基本的にエリックから離れず、知らないものには触れないようにといわれたくらいだ。

初めての冒険に心躍らせつづくエリックの後に続きゆっくりと森の中へと入つていった。

第一幕 ペプロローグ3 (後書き)

誤字脱字報告、感想、評価、などなど幅広くお待ちしておりますー
特に感想はほしいかなあ…誰かくれないかなあ…〔電柱〕
チラツ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5753z/>

オレとアイツの人形劇 【リメイク版】

2011年12月31日16時57分発行